

第 30 回 北海道建築賞・北海道建築奨励賞 審査経緯

2005 年 1 月 25 日、札幌市内で開催された第 1 回審査会で、本年度の審査対象作品を、建築賞応募全作品 7 点、および支部主催「第 24 回北海道建築作品発表会」の作品から委員により推薦された 11 点を加えた計 18 点とすることを確認し、第 1 次書類選考を行った。

この段階で、少なくとも 1 名の委員から選定候補として推された作品は以下の 12 点であった。

(1)CELLS HOUSE (大河内学君、郷田桃代君／インタースペース・アーキテクト)、(2)風の輪 (五十嵐淳君／五十嵐淳建築設計)、(3)トラス下の矩形 (五十嵐 淳君／同)、(4)空のヴォイド (五十嵐淳君／同)、(5)伊達の援護寮 (藤本壮介君／藤本壮介建築設計事務所)、(6)札幌市立資生館小学校・保育園・子育て支援センター (アトリエブंक)、(7)剣淵町 絵本の館 (井端明男君／アトリエアク)、(8)ニセコ本通 A 団地 (井端明男君／同)、(9)北海道日本ハムファイターズ札幌屋内練習場・合宿所 (川野久雄 君／大成建設設計本部)、(10)士幌町食品加工研修センター (アトリエブंक)、(11)小集落のり・デザイン：第Ⅱ期 (小篠隆生君／北海道大学小林研究室+アトリエアク)、(12)ホテル エルム サッポロ (後藤博宗君／北海道日建設計) <以上、順不同>

今回の審査では、書類選考の段階で作品数を 4～5 点に絞り込み (昨年は 10 点)、現地審査には原則として全委員が臨む (昨年までは 3 名以上の委員) という方針のもとに選考作業を進め、その結果、現地審査を含む第 2 次審査対象作品として、少なくとも 3 名以上の委員から推薦を受けた以下の 4 点が選出された。(なお、従前通り選考の全過程において、審査委員と何らかの関わりがある作品を審査する場合に 当該審査委員は選考に加わらないというルールを遵守した)。

(2)風の輪 (五十嵐淳君／五十嵐淳建築設計)、(3)トラス下の矩形 (五十嵐淳君／五十嵐淳建築設計)、(5)伊達の援護寮 (藤本壮介君／藤本壮介建築設計事務所)、(7)剣淵町 絵本の館 (井端明男君／(株)アトリエアク) <以上、順不同>

その後、2005 年 3 月 31 日の最終審査会までに上記作品の現地審査が行われた。委員会が設定した審査日程に都合がつかない委員も、可能な限り別途、現地で作品を見ておくこととした。さて、最終審査会で最も多くの支持を集めた作品は「伊達の援護寮」であった。

これは、回復期にある精神障害者の社会復帰をサポートするための施設で、最大 20 名が起居する個室と共有空間を、管理部門がさりげなく支えている。敷地 は遥かに太平洋を望む丘の上 にあり、作者は北海道の中では比較的穏やかな気候に恵まれた地域の特性を活かすべく様々な

工夫を凝らしている。基本となる 5.4m 角の空間単位を、隅部で微妙な角度を持たせて繋ぎながら全体を構成する平面計画が、「家のような落ち着いたスケールと都市的な多様性」の両立を図るうえで見事に生かされている。変化のある屋根の連なりが伝統的な小集落を思わせる外観と、天井を低く抑えた内部空間との間に齟齬あるいは対立を見る意見もあったが、ここでは一方の視点で全てを律するよりは、むしろ複眼的な見方を直截に表現する作者の柔軟な考え方を支持すべきだろう。一定の規範に則った空間構成や、黒と白を主調とする色彩計画に、作者のストイックな形式性が感じられ、その点を「冷たい」と評する委員や、小屋裏換気が十分でないことなどを危惧する意見もあったが、寒冷地の常套句的形態言語に拘らない軽快なスタンスのもとで建築の可能性にチャレンジした作者の清新な感性と明快な論理を高く評価する意見が多数を占めた。この施設で営まれる日常の生活が、居住者の精神を癒し、社会に復帰する意欲を取り戻す上で有効だとすれば、その中で「空間の力」が寄与する部分も小さくないと思われる。ただ、技術的な部分など、俄には評価しにくい部分もあり、まだ若い作者の今後の展開を期待して、今回は北海道建築奨励賞を贈ることとした。

「剣淵町 絵本の館」は道北の町の市街地に建つ小図書館である。楕円形の中庭を囲んで多様な形態や構造の空間が並び、回廊を巡るシークエンスは変化に富んでいて楽しい。この建築が醸し出す一種ワクワクする感覚は、利用者の多くが子供であることを考えると一層相応しいものに思える。15年以上にわたり町が進めてきた「絵本の里づくり」の拠点施設として、町民のみならず来訪する多くの人々に親しまれている事実から、この施設が目論見通りの機能を發揮していることも分かる。総じて水準の高い優れた建築であることは大方の認めるところで、受賞作に推す委員もあったが、設計者は1995年度に北海道建築賞を受賞した経緯もあることから、あえて表彰を重ねることに慎重な意見が大勢を占め、今回の表彰は見送られることとなった。

「風の輪」はサロマ湖に近い常呂町の田園地帯に建つ、里子と里親が共に住むための施設である。4.55m スパンの木製集成梁を長さ約 43m にわたって並べた細長いワンルームの中で、床レベルの変化や柱、筋違等の配置により空間の分節を図り、生活するための場所を獲得している。同一部材の反復使用を徹底したことが、結果的にニュートラルな空間創出を可能としただけでなく、基礎底を地盤面から 1200 mm 以上掘り下げなければならない凍結深度の条件を積極的に活かして半地下の生活空間を生み出すなど、地域に根を下ろして活動する作者ならではの工夫が随所に見られる。

同じ作者による「トラス下の矩形」も、佐呂間町の市街地に建つワンルームタイプの木造平

屋建て住宅である。一辺約 9m の正方形平面に、この地域では農業 用施設に使われる大スパンの既成木造トラスを架けることによりベースとなる大きな無柱空間を創り、床のレベル差や適宜配置された造作家具によって、若い夫婦と二人の子供が生活する場所を創出している。

この 2 作品に共通するのは、ユニヴァーサルな大空間の中に主として壁以外の要素を用いて「固有の場所」を形成して行く設計手法である。いずれも、既存の住居型式に拘らない自由な発想がフレキシブルな内部空間を生み、そこで営まれる生活に生気を吹き込んでいる。

地域を拠点に、地域に相応しい生活空間を模索する作者の姿勢には多くの委員が共感を寄せたが、この作者も 1996 年度に「白い箱 (BOX) の集合体」で 北海道建築奨励賞を受賞していることから、慎重な審議の結果、今回の表彰は見送ることとなった。

(文責：大矢 二郎君)

第30回 北海道建築奨励賞

藤本 壮介 君 「伊達の援護寮」の設計

噴火湾を見下ろすなだらかな広い斜面に、様々な家々が寄り添って形成された山岳集落か何かのように建っている。その建物の表情は、見る方向によって様々に移り変わり、決して大きくない施設ではあるものの、一見して全体像を把握することは難しい。また外部とは対照的に真白い内部へと入ってみれば、動線に沿って歩くにつれ、風景が右へ左へと断片的に様々な角度で現れ、そこに一貫したストラクチャは見出し難く、方向を見失いそうになる程である。

精神障害者が社会へ復帰することをサポートする施設という容易ではないプログラムであり、空間的な体験としても良い意味での複雑さを感じさせるが、ここで為されている建築的操作は、基本的に極めてシンプルなものである。5.4m 角のボリュームを、角の一点で接しながら連結していくこと。この部分と部分を 接続していくルール (=関係性) のみがまず規定されているのであり、そこに斜面の勾配や屋根勾配、高さと角度の変化などが加わることによって、結果として 心地よいスケールの空間と場とが多様に創り出されている。近年の建築が、主に都市や敷地条件など建築の「外部」にその設計の論理を求める傾向にある中で、このようにまず建築の形式性を吟味することを出発点とするプロセスは、逆に新鮮でもあり、作者独自のスタンスを感じ取ることができる。多くの建築家によって建築の自律的な形式性が主題とされたことはかつても あったが、それらは主に建築の論理を飛躍的に再構築するためのものであり、いわば抽象的な水準に止まるものであったように思われる。しかしこの作品においては、作者の眼はおそらく具体性へと向けられている。形式的操作を前提としながらも、それによって実際にどのような空間が立ち現れ関係性がつくられるのか、いわば具体的な可能性を最大限に引き出すための、まさにルールのようなものとしてあるかに見える。例えば先に述べた部分と部分の関係から生まれる空間と場の多様性、5.4m 角のボリュームの隙間につくり出されるスケールの良いアルコーヴのような場、様々な方向に開ける風景など、ここでの空間的特質のその全てが、前提となる形式から導き出されているとあってよい。審査においては、施設の性格上、テクスチャの平板さや外部空間との動線的な接続に対する疑問なども出されたが、ヒエラルキカルではない空間・関係性をつくり出すための作者の一貫した姿勢や、手法・プロセスに対する意識の高さは、作品自体の質と共に、今後の可能性も含めて高く評価できるものだろう。一方、ここでの作者の方法論が、現実的に建築の「外部」に広がって存在する具体性との関係にまで敷衍できるかどうか、その点は実に興味深いところでもある。

(文責：山田 深君)